

札幌市次世代育成支援対策推進協議会での主な意見

第 1 回札幌市次世代育成支援対策推進協議会（15.11.6）

行動計画の今後の方向付けについては、総花的というよりは、どれかを優先していくというような議論も必要。

長時間保育とか、病気の子どもを預かる保育園ができてよかったと思う反面、子どもの立場に立つと親の側にいられる時間が少なくなっている。また、実際に親が本当に責任を持って子育てしている時間も少なくなってきたと思う。

仕事を休むことができない状況なので、子どもに熱があるのに「保健室で寝てなさい」と言って、無理に通学させる親もいるのでそういった時は休んで看護できるような労働環境の改善が必要。

買い物に行きたい等の理由で託児所代わりに土曜日に幼稚園に預けていく親がいることは幼稚園としては問題ですが、それで親の自由な時間が確保され、子育てにまた専念できると感じてくれるならいいことだとも思います。

身体的な障がい等を持った子どもの親は「子育て」よりも治療や訓練に専念する傾向があります。こういったことから病気の子どもを育てたり、その親を援助できる環境をつくっていく必要があると思う。

「食育」については学校でも行っているが、学校では平日の給食の週 5 回だけであり、基本的には家庭で行うものではないかと思う。

地域において、子どもを支援するために、学校の先生と地区の民生委員・児童委員、家庭児童相談員がお互いの役割と連携をもう一度再確認する取組みをしている。

幼稚園に通園している子どもで 2 人以上の兄弟がいるという子どもは 6 割以上いました。（1.06 という合計特殊出生率を考え合わせると）少子化は、（一人の女性が）子どもを多く生まないからではなく、結婚しない人や子どもを生まない人が多いことが原因だと思う。

第 2 回札幌市次世代育成支援対策推進協議会（15.12.9）

札幌市の特徴や他の地域と異なった点を検討することにより，札幌市独自の視点で計画ができると良い。

子育ては“女性”がするという今までのイメージを変えるためにも，行動計画では“男女がともに”や“家庭が”といった文章表現にしているほうが良い。

子どもは親の姿を見て，将来子どもを持ちたいという意識が育つので，親が家にいられるよう長時間働かなくても生活していける環境づくりが大事。

育児休業が取れることにはなっているが，実態として取れる雰囲気にはなっていないことも多いので，社会・企業で考え直したほうが良い。

経済的に苦しいので，働くためにも託児所に預けているというよりは，贅沢をしたいので託児所に預けて働くという親が見受けられる。

行動計画策定は企業にとって不利益のような捉え方をされていることもあるが，少子化は市場経済を縮小させてしまうので考え方が相反するものではない。企業は長期的な視点に立って「仕事」や「富」を分け合うという考えも必要。

子育ての原点は「家庭」にあるとともに，今の子どもには「ゆとり」も必要なので，今後の施策を考えるにあたっては「家庭」と「ゆとり」といった考えが大事。

0～2歳児の多くが在家庭であることから，人と接する機会が少なかったり，親の孤立による閉塞した家庭環境下で育つ子どもへの影響を良く考えたほうが良い。

最近は何事かになってきており，子どもたちだけで遊べない環境にあるので，同じ世代の子どもたちが気軽に集まり，遊べる安全な場所が欲しい。就学前の子どもが集まる場所がないので，母親が各児童会館を渡り歩いている。学校の空き教室の活用や解放がもっとできないか。

市民をはじめ，子どもと日々接する教師にも「子どもの権利条約」は周知されていないと思うので，いろいろな機会を通じてアピールする必要がある。